町をささえる消ぼうだん

御津北部小・３　大屋　柚奈

みなさんは、「消ぼうだん」って何か知っていますか。消ぼうだんは、消ぼうしょの人ではありません。ふだんはほかの仕事をしていて、火事やさいがいが起こったときにだけ、現場にかけつける人たちのことです。消ぼうしょよりは少ないけれど、みんなで会ぎをするつめ所、消ぼう車やホースなどの道具を持っています。そして、その消ぼうだんに、わたしのお父さんも入っています。

お父さんは、ふだんはふつうの会社員ですが、火事やさいがいが起こるとれんらくがきて、活動服に着がえて出動していきます。真夜中でねていても、れんらくがあればかならず出動していきます。また、何もない土日には、消ぼう車や道具の点けんをしたり、そうじをしたりしています。さらに、一年に一回ある消ぼうだんの大会でゆう勝するために、夏は毎日仕事から帰って来てから練習に出かけます。わたしは、そんなお父さんを見て、仕事で遠くに出ちょうしてつかれているときもあるはずなのに、何でそんな面どうくさそうな活動をするんだろうと思っていました。前に、お父さんに、

「何で消ぼうだんに入ったの。」

と聞いたことがありました。お父さんは、

「たしかに面どうだなあと思うことはあるけれど、こんないなかにはひつような活動なんだよ。」

と言っていました。わたしは、その意味がよく分かりませんでした。

でも、今年の六月のはじめに、とよ橋やとよ川でおきた大雨のさいがいで、お父さんが話していたことの意味がよく分かりました。

その日は、朝からずっと大雨で、兄はしゅう学旅行の日でした。お父さんとお母さんはいつも通り朝から仕事、わたしも歩いて学校へ行きました。仕事に行く前にお母さんが、

「今日は大雨って言っているけれど、何かふり方がへんだね。心配だなあ。」

と言っていました。わたしもそれを聞いて少し心配になったけれど、学校が休みではなかったので、仕方なく行きました。

昼ぐらいになると、どんどん雨が降ってきました。教室のまどから外を見ると、水たまりが川のように流れているところもあって、ふ安になってきました。しばらくして、今日は引きわたし下校になると先生が言いました。じゅ業が終わると、お母さんがずぶぬれになって学校までむかえに来てくれました。とちゅうで車がしずみそうになったけれど、何とか学校まで来たと言っていました。家に帰ってテレビをつけると、とよ橋やとよ川のいろいろな所が川みたいになっているえいぞうが流れていて、これはたいへんなことになったと思いました。

しばらくして、お父さんが仕事から帰ってきました。お父さんは、わたしやお母さん、しゅう学旅行に行っている兄、犬のマロンがぶじだと分かると、すぐに消ぼうだんで行くからと言って出動して行きました。外はどしゃぶりでサイレンも鳴っていたので、わたしはとても心配になりました。

その日、お父さんは、夜おそく帰ってきたそうです。次の日の朝に聞いた話だと、川からあふれた水を止めるために土のうをつんだ

り、土しゃくずれした場所を通行止めにしたりしたそうです。お父さんは、この大雨の前の週に土のうをつむくん練をしていたそうで、とても役に立ったと言っていました。

わたしは、このことがきっかけで、消ぼうだんがひつようなわけが少しだけ分かりました。そして、さいがいにそなえる大切さも分かりました。今まで、消ぼうだんてっ何しているのかなとずっと思っていたけれど、町をささえるとても大切なそんざいなんだと思いました。だからわたしは、自分のお父さんが消ぼうだんに入っていることをとても自まんに思っています。

5・11